

韓流と日本人の韓国観

—ブームがもたらした変化とは—

植田 華織

(君塚洋一ゼミ)

目 次

はじめに

第1章 日本における韓流ブームとその背景

第2章 悲恋ドラマにみる韓流の要素

第3章 オーディエンスがとらえた日韓の文化の相違点

第4章 ドラマの魅力と韓国文化

第5章 韓国に対する意識の変化——韓流ブームがもたらしたもの

はじめに

この卒業論文は、自分自身が韓国映画にはまったことが出発点である。きっかけは、韓流ブームの報道であった。何気なく「ヨン様」や『冬のソナタ』という言葉を目にし、また韓国俳優に熱中する中高年の女性たちの報道を見て、少しバカにしていた所もあったのかもしれない。大学に入学し韓流ブームだし、第二外国語に韓国語でも取るかと安易な気持ちで受講したことが、今となっては、韓国ドラマや映画を見るきっかけになったように思う。

初めて韓国映画を見たのは、日本で韓国映画がヒットすることとなった「シュリ」、2001年のことであった。自分自身幼かったせいもあるのか、日本映画よりリアルな殺戮シーンや軍事シーンを描く韓国映画に驚いたことを覚えている。欧米文化が流通するなか、日本は先進国の1つでアジアの中でもトップであるという意識があり、隣の国である韓国や、文化的な影響を強く受けた中国などよりも日本はすべてにおいて優れているという思いを持っていたことが、この作品を見て驚いた原因なのかもしれない。

しかし、韓国や中国では「日本の文化や日本語を「文化的に劣ったもの」として取り扱う傾向が

強かった。」という指摘を『「日式韓流」——『冬のソナタ』と日韓大衆文化の現在』という文献で読んで驚いた。日本は韓国や中国の人々に先進国、近代化の国と思われているとばかり思い込んでいたのである。双方の思い違いは、近くて遠い国として、第二次大戦後のかなりの期間、表立った文化交流がなかったことや、互いについての偏った教育や報道が原因の一つにあるだろう。だが、現在の韓流ブームで日本における韓国観は変わりつつあるようだ。お互いの文化背景を正しく理解してこそ、作品表現である映画やドラマを楽しむこともできるのではないだろうか。

日本では、韓流ブームをきっかけとして、韓国語や韓国の文化を学ぶ人が増え、俳優の日本訪問など様々な交流が盛んに行われるようになったが、一方、韓国では、2002年度FIFA日韓共催のワールドカップと前後する日本の文化開放政策により、日本の大衆文化がせきをきったように紹介されるようになった。

このようにもともと政治・経済・文化において長い交流の歴史をもつ日韓両国の文化交流が近年になってようやく盛んに行われるようになったのは、韓国において、やはり過去の戦争による侵略の歴史を原因とした反日感情という根強い反発があったためであることを感じ取ることができる。

かたや、日本においても、その歴史をあまり深く考えず、生活してきた私たち自身にも考えるべきところがあると感じた。そして韓流ブームの中、日本と韓国の間にある歴史や、両国民が抱いてきた偏見について学ぶことも、作品をよりよく楽しみ、理解するうえで重要なことだと考えるようになった。私自身、韓流ブームを通じて、ドラマや映画を視聴するようになり、韓国の文化やファッションなどの流行に触れることで、これまで韓国に抱いていた誤解や偏見が少しずつ薄れていったことは確かである。

さらに私は、実際に韓国を訪れてみて、自分自身の見方が間違っていたことに気づかされた。日本の方がファッションもおしゃれで最先端という意識は誤っていたし、これまでおぼろげに抱いていた韓国観とは全く違うものであった。また、日本語ができる人がとても多いことにも驚いた。日本語を話す韓国人の数は、韓国語を話せる日本人とは比べ物にならないのではないのだろうか。韓国の人は反日感情が強いというイメージもあったのだが、日本語を話し、親切に接してくれる人もいたことにも少し驚いた。

現在、多くの日本人が、ブームを機に実際に旅行に出かけたり、ドラマや映画を通じて韓国という国独自の文化を学んでいる。私自身も、韓流ブームによってドラマなどの作品に触れる中、以前に持っていたぼんやりとした韓国観が明らかに変化したことを実感している。そして、コミュニティサイトによる様々な情報収集の中、韓国観を変化させたり、韓国の文化に興味や関心を持っている日本人が他にもたくさんいることを知った。近くて遠い国とされていた韓国が、戦後これほどまでに身近な国となるのは、韓流ブームがもたらした良い面であると言えるかもしれない。しかし、一方には、現在の日韓報道にもあるように、竹島問題など、政治的な歩みよりが進んでいない現実もある。

このような状況をふまえ、この論文では、韓流ブームの一端を作った韓国ドラマに日本人がなぜ傾倒するようになったのか、そしてドラマや映画などの文化作品が入り口となって韓国に関心を持つ人が多くなった理由は何なのか、作品およびコミュニティサイトの分析を元に、私たちが韓国ド

ラマに惹かれる理由やその韓国観の変化を明らかにしたい。

第1章では、韓流ブームとは何かについて述べ、第2章では悲恋系の作品に絞り、韓国ドラマに見られる物語設定や演出などの特徴を見る。第3章では、韓国ドラマの視聴者（オーディエンス）の声をインターネットサイトmixiのコミュニティから分析する。第4章では、第2章、第3章の分析をふまえ、日韓の作品表現の違いと、それに対して私たちがなぜ韓国ドラマに魅力を感じるのか、日本と韓国の同質性によるノスタルジー、また異質性について考察する。最終章では、ドラマや映画といった文化交流を通じて日本人の韓国観にどのような変化があったのか、これをふまえ、さらに日韓の今後の展開はどのように進むことが望まれるかについて論じる。

第1章 日本における韓流ブームとその背景

韓国ブームは何よりも『冬のソナタ』というドラマが作ったとも言えるが、それ以前の交流はどのようなものだったのだろうか。ここでは、現在の日韓両国の活発な文化交流の初期段階となった1998年から2002年の日韓の文化交流の歴史を見る。

日韓共催のW杯の影響もあり、2002年以降さらに両国の文化交流は盛んになってきている。現在、日本においては「韓流」と言われるほど、韓国の映画やドラマが人気を集めている。そしてこの韓国ブームは、日本のみならずアジア全体に及んでいる。

もともと戦後の日本では、韓国は「近くて遠い国」と言われており、経済面・文化面であまり意識されることはなかった。一般に日本で韓国の作品が注目されるようになったのは、近年では映画『シユリ』がきっかけである。その後、ペ・ヨンジュンが主演したドラマ『冬のソナタ』でさらに注目を集めるようになった。『冬のソナタ』は日本で2003年4月からNHK-BS2で放送され、好評を得て2004年4月より総合テレビで放送、大ヒットとなり、いわゆる「冬ソナ現象」を巻き起こした。特に年配の女性に人気を集め、「ヨン様」の熱烈なファンが増えて、韓国観光ツアーや韓国語講座など、様々な分野に強い影響を与えたといわ

韓流と日本人の韓国観

表1 日韓交流年表1998—2002

1998年	9月 10月	第3回釜山国際映画祭で日本映画22本上映 「HANA-BI」、「影武者」、など日本映画公開ラッシュ 韓国三人組女性グループ「SES」、日本デビュー／アニメ「クレヨンしんちゃん」が、韓国キー局 SBS で放送、大人気
1999年	6月 8月 10月 11月 12月	神野美伽が「海峡をこえて」で日本人歌手初の韓国デビュー。／アニメ「ポケモン」が韓国 SBS で放送開始 第1回日韓文化交流会議開催（ソウル） 東京国際映画祭 '99 で話題作「シュリ」日本初上映 日本映画「Love Letter」が韓国で120万人以上動員、大ヒット アジアフィルムフェスティバル '99 で日韓共同製作の「ペパーミント・キャンディー」上映
2000年	1月 2月 5月 7月 8月 11月	韓国映画「シュリ」が日本で100万人以上動員する大ヒット／韓国伝統のリズムを盛り込んだミュージカル「NANTA」日本初公開、以降毎年日本ツアー実施 「鉄道員ぼっぼや」韓国公開で、降旗康男監督が訪韓 コミック・ホラー「クワイエット・ファミリー」日本公開／パークショングループ「PURI」来日公演、以降毎年日本ツアー実施 釜山国際ロックフェスティバルで SIAM SHADE が日本語で歌う／キネマ旬報社、韓国で最大部数の映画誌「CINE21」と業務提携 CHAGE&ASKA ソウル公演、英語版CDもリリース ハン・ソッキュ主演の映画「カル」日本公開
2001年	1月 4月 5月 7月 11月	ユン・ソナ「もう一度キス」（NHK）で日本ドラマ初主演／日韓合作ドラマ「ちいさな橋をかける」（TBS）放送／日韓合同アリア「春・春・春」「虎月伝」の日本公演（韓国は3月）／尾崎豊の「I LOVE YOU」の韓国語カバー曲が韓国チャート1位 SMAPの草なぎ剛による「チョナンカン」放送開始（フジテレビ）／「サンデーGX」において韓国のコミック「新暗行御使」連載開始 映画「JSA」日本公開／スピッツの韓国初コンサート／「チョナンカン」草なぎ剛、韓国観光公社から感謝状授与／「TOKYO WALKER」の姉妹誌「SEOUL WALKER」創刊 韓国女優イ・ヨンエが「AERA」表紙に／「ドラえもん」が韓国 MBC で放送開始／ユン・ソナ主演のドラマ「ファイティング・ガール」放送（フジテレビ）／アニメ「となりのトトロ」韓国公開、宮崎駿監督訪韓 笛木優子（ユミン）韓国ドラマ「ウリジブ（我が家）」（MBC）にレギュラー出演／在日コリアンを描いた映画「GO」公開
2002年	1月 2月	日韓国民交流年スタート。両国で開幕式開催。藤原紀香、キム・ユンジン両氏が日韓親善大使に／BoAのシングル「Listen to My Heart」がオリコンチャート3位に 日韓合作ドラマ「フレンズ」放送（TBS-MBC）、ウォンビンに注目が集

3月	まる／韓国映画「猟奇的な彼女」が夕張映画祭でグランプリ受賞 稲垣吾郎とキム・ユンギョン共演のドラマ「結婚の条件」放送（テレビ朝日）/Voice of Korea/Japan のW杯ソング「Let's Get Together Now」がオリコンチャート1位に／BoAの初アルバムがオリコンチャート1位に
4月	「友よ チング」日本公開
5月	第3回日韓文化交流会議開催／Chemistry、W杯前夜祭で Voice of Korea/Japan として公式ソングを歌う。戦後初めて日本語の楽曲が公式に放送
6月	「千と千尋の神隠し」韓国公開、200万人以上動員／韓国グループ「神話」NHK ポップジャム出演／草なぎ剛 韓国語歌詞の「愛の唄 チョンマルサランヘヨ」日韓両国でCD発売
8月	韓国最大のオンラインゲーム「ラグナロク・インライン」日本展開
10月	韓国ドラマ「イブのすべて」がテレビ朝日で放送
11月	日韓合作ドラマ「ソナギ」放映（フジテレビ-MBC）／北野武監督の「Dolls」、釜山国際映画祭の閉幕作として上映
12月	韓国映画「ラストプレゼント」、「火山高」公開／チョナン・カンの語学本「チョンマルブック」発売／「an an」ソウル・ハングル特集／TBS が自動翻訳システムによる韓国語インターネットサイトオープン／第44回日本レコード大賞で BoA、「Listen to My Heart」で金賞受賞。「紅白歌合戦」にも出場

「日韓文化交流この1年—2002年日韓国民交流年をふりかえる—」国際交流基金

れる。またヨン様ブームによる経済効果は日本で2000億円、韓国で1000億円と発表されている。

韓国映画が日本の映画館でさかんに上映されるようになったのはわずか10年ほど前、またテレビのいわゆる韓流ドラマが爆発的な人気を得るようになったのは、ここ5～6年のことに過ぎない。最初は抵抗を覚えていた人もここまでの韓流ブームの中、報道や口コミを通じてテレビドラマなどの韓国作品に触れる機会を持つうちに、それにはまっていくな現象が起きている。

レンタルビデオ店では、人目につく一番の場所に韓国ドラマのDVDやビデオが並び、100万人の観客を動員する映画が生まれる時代になった。そして、韓国ドラマに描かれた初恋、かなわぬ恋、引き裂かれた愛、家族愛など、様々な形で男性と女性がお互いを想う気持ちや親子の純愛と絆の深さに、多くの日本人、特に女性が惹きつけられた。また、日本では忘れ去られようとしている古き良

き時代の人情が、韓国の映画やドラマに生き続けていることに興味をかきたてられたこともあるようである。

『冬のソナタ』の人気をきっかけに起こった韓流ブームは、一般に文化の担い手として、これまでスポットのあたることの少なかった中高年の女性ファンが特に注目を浴びたことが、今までのブームとの大きな違いかもしれない。『冬ソナ』及び、ペ・ヨンジュンのファンは一般的に30代から60代の女性ファンが多くを占める。韓流ブームがテレビや週刊誌など、連日報道されるこれほどの盛り上がりを見せたのは、見逃されることの多かった文化の担い手として中高年の女性たちに社会のスポットが当てられたことも一つの要因となったのではないかと考えられる。

さらに、彼女たちがドラマの視聴に留まらず、それ以外の日常生活でも韓国の文化に深く関わるようになったことも重要な点である。ドラマとい

う作品表現だけでなく、韓国という一つの国の文化全体に興味を持ち、韓国語教室、ドラマのロケ地ツアー、旅行など、様々な活動を広げていることが大きな特徴といえる。

韓流ブームの担い手として取り上げられている中高年女性層のこれまでの活動、そしてブームをきっかけに韓流にはまっていたそれ以外の人々の今後の活動は、これからの日韓交流、文化交流を語る上でとても重要な役割を果たしていくのではないかと考えられる。

第2章 悲恋ドラマにみる韓流の要素

このような韓流ブームを背景に、日本人々々なぜ韓国ドラマにはまるのか、数ある韓国作品の中からここでは、悲恋系の3作品を比較し、現在の日本人を捉える要因について作品をもとに考察する。

まず1作品目は、韓国で驚異の最高視聴率44.1%を記録し、本国では冬ソナを凌ぐ人気を得て珠玉のラブストーリーと評される『天国の階段』である。あらすじを紹介すれば、「兄弟のように育ったソング（グォン・サンウ）とチョンソ（チェ・ジウ）は、再会を約束して別れる。しかしその8年後、記憶を失ったチョンソは死んだことにされ、別人・チスとして生きていた。ソングは、チョンソの面影を追ってチスに近づくと、愛し合う二人の関係に、チョンソを愛するテファやソングを愛するユリの思惑が絡み合い、それぞれの運命が大きく動いていく……」

2作品目は、2004年韓国で放送されるや本国では主人公のファッションや台詞が大流行となり、「ミ・サ（魔人）」と呼ばれる多くの熱狂ファンを生み出した『ごめん、愛してる』である。この作品は韓国において、どこまでも切なく悲しいラブストーリーと評され、最高視聴率29.5%を記録した。あらすじは「幼い頃、オーストラリアに養子にだされたムヒョクは養父母にも捨てられ、ストリートチルドレンとして成長する。そして恋人ジョンも自分を捨て、金持ちのマフィアと結婚することを選ぶ。ジョンの結婚式がマフィアの襲撃にあい、ムヒョクはジョンをかばい、頭部を銃撃される。ムヒョクは一命を取り留めるが、頭に残った弾丸は摘出できず、余命わずかとなる。そんな

ムヒョクは贅沢な暮らしをする女優の母とその息子で人気歌手のユンを見つける。貧困のため、仕方なしに養子にだされたと思いき生きてきたムヒョクは母への復讐のために、ユンに近づく。そんな中、ユンを思い続ける幼馴染でスタイリストのウンチェと接し、彼女の温かさに引かれていくが……」

3作品目の『秋の童話』は、韓国2000年制作のテレビドラマで、韓国で最高視聴率42%を超える大ヒットとなった。兄妹愛から悲劇の愛を描いたストーリーにアジア中が涙した物語。『冬のソナタ』『夏の香り』『春のワルツ』へと続くユン・ソクホ監督「四季シリーズ」の第1作である。あらすじは、「仲の良い兄弟のジュンソとウンソ。ウンソと同じクラスで貧しい家庭のシネは裕福でやさしい兄がいるウンソに嫉妬していた。ある日、ウンソは交通事故になって運ばれた病院で両親と血液型が合わないことを知らされる。その後、ウンソとシネが出生時に取り違えられていたことがわかり、それぞれの親の元に戻ることになる。数年後、リゾートホテルで働くウンソは、ホテルオーナーの息子テソクと知り合う。帰国してジュンソとウンソはやっと再会でき、兄弟としてではなく、惹かれあうが……」（注1）

3作品ともに日本でもヒットし、韓流ブームの流れを作った作品である。3作品の分析に先立って、まず、韓国ドラマについての評論やコミュニティサイト（注2）の情報をもとに、韓国ドラマに比較的良好に見られるとされるプロットや設定のパターンを整理してみると、以下のような項目が挙げられる。

- ①事故、交通事故が多い。
- ②事故による記憶喪失。
- ③病気：白血病や事故の後遺症 不治の病など。
- ④出生の秘密：実は異母兄弟などの血縁関係。
- ⑤留学：アメリカなど欧米への留学が多い。
- ⑥身分の差：主人公もしくは相手役が社長、社長令嬢、御曹司など。
- ⑦純愛、悲恋の物語。
- ⑧後悔、恨みなど韓国人独自の感情。
- ⑨三角関係、もしくは四角関係。主人公やヒロインの邪魔をする恋敵がいる。
- ⑩幼少期からストーリーが始まり、現在へと繋がる。

- ⑪台詞は、小説の台詞のようなストレートに響くものが多い。
- ⑫登場する男性俳優は韓国でも人気のモムチャン（健康で美しい肉体という意味の韓国語）な筋肉質の俳優が多い。
- ⑬よく見られる特定の場面。例：おんぶシーンなど
- ⑭障害となる人物。
- ⑮悲しい過去を持っている主人公。
- ⑯年功序列の韓国。特に親の存在は大きい。

- ⑰記念日を大切に作る韓国。恋人や愛する人への贈り物が多い。

顕著なものだけでも、きわめて多くのパターンを抽出することができる。では、これらの点について、3作品の具体的内容を挙げてみると下表のようになる。

韓国ドラマによく使われるパターンが、視聴者の涙を誘ったこの3作品共に共通して見られることがわかる。では、日本では「ベタ」とされるこ

表2 悲恋3作品にみる韓流ドラマの要素

ドラマタイトル	天国の階段	ごめん、愛してる	秋の童話
①事故	ヒロインの交通事故	銃弾をうける事故	交通事故
②事故などによる記憶喪失	ヒロインの記憶喪失		
③病気	目の癌	後遺症	骨髄癌
④出生の秘密 兄妹	血のつながりはないが、兄妹のような関係	母に捨てられたと誤解	産院での取り違え 兄妹として育つ
⑤留学	留学	オーストラリアに養子	アメリカへ留学
⑥身分の差	御曹司、社長	母は女優 恋敵は有名歌手	ホテルのオーナーの妻の子
⑦純愛、悲恋	ヒロインの死	主人公、ヒロインの死	主人公、ヒロインの死
⑧「恨」の感情 (第4章で説明)	—	—	—
⑨三角・四角関係	四角関係	四角関係	四角関係
⑩幼少期からスタート	中学生から始まる		中学生から始まる
⑪台詞	ストレート 純粹	ストレート	ストレート
⑫登場人物の身体的特徴	筋肉質	筋肉質	筋肉質
⑬よく見られる特定の場面	おんぶ シャワーシーン 男性俳優の涙 看病	おんぶ シャワーシーン 水泳シーン 男性俳優の涙 看病	おんぶ 男性俳優の涙 看病
⑭障害(いじめ)	継母と連れ子のいじめ	ライバル	婚約者
⑮悲しい過去	親の死	母親に捨てられた過去	出産取り違え、離ればなれ
⑯親(母親)の重要性	母は社長	女優	生みの親と育ての親
⑰恋人へのプレゼント	演出あり		演出あり

のような設定のドラマになぜ日本人の人氣が集まるのだろうか。

まず、①事故は、ドラマを劇的にする効果がある。またこれは、②事故による記憶喪失や死につながるきっかけを与え、通常ではありえない異常な状況によって視聴者をひきつける。韓国ドラマでは、主役がこうした交通事故に巻き込まれることによってドラマが展開していくのである。日本人にとっては、ありえない展開だと感じてしまうことが多いが、実際に車中心の社会である韓国では事故もつきものである。人口あたりの交通事故の比率は日本と比較して韓国は5.8倍と高く、必ずしも大げさな嘘でもないことがわかる。

③病気は、定番中の定番で、癌や白血病などが多い。韓国の若者はそんなに癌になりやすいのか、と感じるが、悲恋系にははずせない設定である。

④出生の秘密は、①と同様ドラマを劇的に変化させる。儒教の国の韓国ではタブーである異母兄弟や兄妹の話が多いが、実際は考えにくい。視聴率が命の韓国ドラマはスキャンダラスな内容に走りがちな面がある。

⑤留学も韓国ドラマのおきまりである。日本でも就職氷河期と呼ばれる時期があったが、韓国はそれに輪をかけて就職が厳しい。受験や就職の厳しい韓国ならではの現象であり、ドラマの定番ではあるが、「韓国の習慣」とも言える。

⑥身分の差は、人一倍上昇志向が強く、今の自分の状況に満足しないといわれる韓国人の国民性が関係している。さらに韓国社会の葛藤の中でも、5割以上の国民がこの点を最も深刻な問題としている背景がある（曹喜澈「食わず嫌いの韓国」）。韓国人一般が興味を持っているのが、貧富の差なのである。

⑦の純愛、悲恋は今回この3作品に共通している点で、ドラマに感情移入しやすい。さらに今回比較した作品は、3作品とも主人公、ヒロインのどちらか、もしくは両方が死を迎えて終わる。

⑧「恨」という感情は、日本人には理解しにくい感情である。詳しくは、第4章で述べることにする。

⑨四角関係は、主人公やヒロインに恋敵が存在する設定である。多くの障害を乗り越えて結ばれる二人に視聴者は感情移入し、恋敵がいることで

より2人をひきたてる効果がある。

⑩幼少期からスタートは、幼少期から現在に続くことで、運命や縁といったより強い繋がりを描いている。

⑪台詞は、日本のように言葉にしないことが美学となる発想とは異なり、日本人には照れくさい、小説に出てくるような台詞を平気で言ってしまう。しかし、韓国人は、普段から詩の言葉に慣れており、現実離れた台詞にもあまり抵抗を感じない面がある。歴史的に韓国では詩をたしなむ文化を持ち、詩集がベストセラーになることも多く、大手書店などでは詩のコーナーが別に設けられていることが普通である。日本ドラマにはない直接響くストレートな台詞に日本人の女性は惹かれるのだろうか。

⑫登場人物の身体的特徴は、韓国ドラマ全般にたいして言えることだが、「モムチャン」と呼ばれる健康で美しい体を持つ筋肉質の男性俳優が登場する。兵役制度にも関係するのか、韓国では、鍛え上げた肉体の俳優が人気で、また彼らもジムに通うなど、肉体作りの努力を惜しまない。

その影響が、⑬よくみる場面の中で、おんぶをするシーンや、シャワーシーン、水泳シーンなど、肉体を披露するシーンにつながる。また男性が泣くシーンが多いが、感情をストレートに表現する韓国ドラマならではのかもしれない。

⑭障害は、⑨と同様に、障害を乗り越えて頑張る主人公により、感情移入しやすくなる。

⑮悲しい過去は、⑧「恨」とも重なるが、悲しい過去を持っている主人公がドラマをより劇的にみせる。

⑯親の重要性は、年上の人を大切にする韓国では、特に両親や母親を大切にするシーンを良く見る。目上の人を敬い、尊敬するということが、日本では薄れつつあるため、過去の日本のような懐かしさを感じさせるシーンとなるのではないか。

また⑰恋人へのプレゼントは、韓国のお国柄といわれているが、記念日を大切にするという韓国ならではの習慣で、日本人女性の憧れの象徴でもある。

今回は、悲恋系の3作品を比較したが、上述のように韓国ドラマには日本のドラマとは違う、おきまりみたいなものがある。しかし、その中でも

「ドラマのおきまり」と「韓国の文化・習慣」に関わるものがあり、韓国の習慣を理解すると、ドラマも理解しやすくなる。

上記の項目を分類してみると

ドラマのおきまり：

- ①事故
- ②事故による記憶喪失や死
- ③病氣
- ④出生の秘密
- ⑦純愛
- ⑨四角関係
- ⑩幼少期からスタート
- ⑬よくみる場面
- ⑭障害

韓国の文化・習慣：

- ⑤留学
- ⑥身分の差
- ⑧恨
- ⑪台詞
- ⑫モムチャン
- ⑮悲しい過去
- ⑯親
- ⑰プレゼント

こうしたドラマのおきまりの要素は、現在の日本のドラマや映画では「ベタ」とされ、切捨てられるものも多い。また、韓国の習慣は、文化や習慣の違いから生じる日本との違いが多い。詳しくは第3章で述べることとする。

この章では、韓国ドラマに見られる物語設定や演出などの特徴を整理したが、総じてそれらには非現実的な設定が目立つことも事実である。こうした作品は「視聴者に『韓国社会は実際にもこんなのか』と思わせている」という指摘もある。では、なぜ韓国の作品は人気を得ているのだろうか。日本のドラマや社会との同質性、また異質性から起こる驚きや懐かしさなどについて、第3章・第4章でオーディエンス（視聴者）の声をもとに分析する。

第3章 オーディエンスがとらえた日韓の文化の相違点

日本と韓国は、隣国でありながら似て非なるところが多い。それも韓国ドラマにはまる要因とい

えるだろう。日本ではありえないことも韓国では日常茶飯事となるなど、韓国ドラマに見られる日本との文化の違いは、それらにはまる心理的要因にも関わってくる。

日本と韓国のドラマには、どのような違いがあるか。第3章では、地理的に、そして文化的にこれほど近い日韓の違いについて、mixiコミュニティ「韓国ドラママニア」内の『韓ドラ見て気になること』というトピックから、オーディエンスの声を拾い分析することとする。収集したオーディエンスの声は、食文化やドラマの制作の違いなどジャンル分けし、それに関わるコメントを抽出した。言葉の違いはもちろんのこと、同じアジア圏の人間でありながら、日本とは違うドラマにおもしろさを感じているオーディエンスが多いことがわかる。

では、トピックの分野ごとにこうした声をピックアップしてみよう。

■食文化

食文化の違いについての声を拾う。

- 家でラーメンを食べるシーンって、アルミの鍋から直接食べてませんか？しかも、フタを持ったまま…（何故かよく見かけるんですよー）
- ラーメンを食べることも多いですね。それにいつも鍋からそのまま食べたり、蓋をお皿がわりにしていること。女性が食べる時片膝を立てている時、これは風習だからしょうがないわね。
- 韓国ドラマを観ていると、サウナで沢山のゆで卵を食べるシーンが出てきますが、普通の事なのでしょうか？
- バリの出来事では 炊飯器に直接キムチ入れてスプーンでご飯食べてました。。器に盛り付けしないのかなあ〜〜

日本でもとてもポピュラーな食べ物であるラーメン。韓国では、日本以上にラーメンの消費率が高い。しかし、日本のようなラーメン店のラーメンというイメージではなく、インスタントラーメンが基本のようだ。ドラマでは、主人公とヒロインやその兄弟などが一緒に食べるシーン

が多い。

食文化の違いでは、はしを使うことや作法・食べ物は似ているのに、習慣が違うと違和感を感じる。膝を立てて食べる習慣の違い……同質性を持ちながらも異質性を感じる。(似て非なる習慣・食文化)

■車関係

車社会の韓国では、ドラマでの事故もさほど珍しいものではない。しかし、ドラマでよく見かける車に関係するシーンについて、疑問を持っている視聴者も多い。

- 車の運転シーンで、ルームライトをつけて走ってますよね。あれって撮影のためかしら…。よく見えるからいいんですけどねwwww
- 車といえば、運転中に運転する側の人間が恋人を愛おしく見つめるシーン。『そんなに見つめてたら、事故るよっ!』とおもわず心配してしまいます。
- 怒りや悲しみの感情がこみ上げて、乱暴な運転…しかも飛ばす、飛ばす!! 暴走シーンが多いですよね!? ヒヤヒヤしちゃう。。。心臓に悪いです(汗)
- 車の急停車&急Uターン

ドラマ内の車のシーンは、視聴者が見ていたらヒヤヒヤするようなシーンが多い。車社会の韓国であるが、比較的交通マナーが良い日本では見られない行動に違和感を感じている。

マナーや習慣の違い、ドラマの撮影方法の違い、日本と比較することにより感じる違和感。(異なる習慣・異質性)

■記念日・初恋

韓国では、記念日や初恋を大切にするため、例えば付き合い始めたカップルが100日目にお互いにプレゼントを交換する100日記念日など、日本にはあまりなじみのない習慣も多い。

- 2月14日のバレンタイン、3月14日のホワイトデー、そして4月14日のブラックデイと言うのがあって、ホワイトデーにお返

しをもらえなかった寂しい人(恋人の居ない人)はブラックデイにジャジャミョンを食べるとというのが、若者の間では流行ってるみたいです。ホワイトに対してブラック、というジョークから来てるんですね。記念日大好きな韓国人。誕生日には若芽スープ、交際100日目の花束、などよくシーンで見ますよね。

- やけに初恋や二度目の恋とかに非常にこだわる事が不思議～!
- 私がいつも疑問に思ってるのが、なんで毎回恋愛物は初恋なのー? 最初で最後の恋を謳い文句にしてるのが多いですよ

記念日を大切にすることや、相手を想ってプレゼントを贈るなど、日本女性の憧れの象徴でもある光景が普通であることの驚き。(初恋=純潔・純粹な愛・永遠の愛のシンボル、異質性への憧れ)

■俳優の肉体美

韓国俳優はモムチャンと呼ばれる肉体美を持つ俳優が多い。下記の発言のように、男の強さや肉体を披露するシーンなど、日本のドラマにはなかなか見られない。

- おんぶしてませんか……。韓国の男の人マッチョな人多いみたいです。。。。
- 韓国ドラマの中で、バスケットをするシーンがよく登場する気がします!!ポピュラーなんでしょうか? その他にも水泳対決とか。。。なぜ、ここで!?みたいな(笑)
- 飛び蹴りシーンが多い(テコンドーの影響?)

また韓国において、兵役は教育、納税、労働と共に国民の4大義務の一つである。その中で、スポーツ選手や、人気俳優や歌手の兵役逃れが問題となり、多くの波紋を呼んだが、近年はイメージアップの機会にするスターもいる。韓流ブームにより、韓国軍も注目を集め、イメージ改善に努めており、韓流ドラマは兵役の印象までも変えてしまったといっても過言ではない。

日本と韓国の俳優との違いは当たり前のことではあるが、日本と比較してしまう。(俳優の異質性・人物描写における身体性・肉体美)

■ドラマ制作の慣行

ドラマの制作の慣行の違いから起こる視聴者の気になる声を拾う。

- 韓国ドラマって日本と違ってロング放送だからドロドロ展開になりますよね！まるで昔の大映テレビと昼ドラを二で割ったような？話が多いのでは？それと関係はありませんが四角関係の恋愛ドラマが多いと想うのは気のせいかな？
- やたらとブランドのロゴを隠したりする。特にKBS。公営放送っていうこともあるけど昔の日本国営放送より過激、VWのロゴを白いシールで誤魔化したりってのがあったけど。
- 韓国ドラマを見てると、よく画面にハエ(虫)が飛んでるのを見るのですが撮影スタッフさんは気にならないのですかね
- 気になること、韓ドラの時間が毎回違うのが不思議！日本だとCMとかきっちりしてるので、終了時間ぴったりなのに、なんで、1時間1分とか1時間5分とかなの不思議～
- 韓国の放送局には「時間を守る」という概念がないらしいです。つまり番組表に21:50開始、と書いてあっても、21:45に始めても、22:00に始めても問題ないと思ってるようです。だから、番組ごとに時間内に開始し、終わらせようとするのではなく、ただ、番組表にある順番通りに放送していくだけなようです。

国が違えばもちろんドラマの制作方法も違うが、その制作方法の違いから見える日本とのギャップに驚く視聴者も多い。(ドラマの制作方法の違いから感じる異質性)

■貧富の差

韓国の経済事情が見えてくるような疑問について。

- わたしが気になるのは、貧富の差です！貧乏なおうちだと、どんなに血だらけになっても、すぐお布団して寝かすのに、

お金持ちのおうちだったら、すぐ病院！そして加湿器付きの個室！そんなシーンをよく見ます。

- 私が見ていて気になる事は…貧富の差が大きい☆
貧困者には冷たい気がします…
- どんなお金持ちの人でも路上駐車。これがどのドラマでも一番気になります。
- 私が気になるのは 韓国には洗濯機がない！？
貧乏な家だからかと思ってたけどフルハウスではトップスターの家のはずなのにたらいに洗濯板・・・皆さん手洗いが基本なんでしょうか？
- 「日本と同様くらい、すべての家に洗濯機は普及されており、洗濯機の使用が基本。ただ洗濯機を使うと衣類がいたむという考えを持つ人は、手洗いをします。」
- やはり、日本同様洗濯機は普及しているんですね！そうじゃなきゃ、おかしいですね。日本より携帯は発達しているし、ネットも日本より普及している国が洗濯機がないなんて、おかしい！ですし。

ドラマの題材として、やはり貧富の差は定番となっている。洗濯板を使うシーンやお金持ちの象徴である海外留学など、韓国ドラマに貧富の差はつきものである。ほとんどの韓流ドラマが、貧富の差を扱うので、特に貧しいことを表現するシーンでは、「日本より経済発展が遅れている?!」という誤解めいた印象を視聴者に与えることも多い。

逆に、携帯電話については、日本より優れていると指摘する視聴者が多い。今では、日本でスライド式の携帯電話も普及しているが、韓国のドラマでは、日本より早くスライド式の携帯電話が見られるなど、急速な経済発展により、インターネットや携帯電話などの情報ツールの発展を視聴者にも感じさせている。現在の韓国では、「ネティズン」と呼ばれる一部のインターネットのサイトのコメント者(ネットオーディエンス)の誹謗中傷などにより、韓国女優や俳優の自殺という社会問題まで起きている。

(制作過程の違いから起こる異質性・日本以上

に進んでいるネット社会への驚き)

の再発見)

■風習や慣習

- あと、正座して両手を上に上げ続けるのも反省ポーズの定番のようでお国柄が見られておもしろいな。
- 誕生日にケーキとわかめスープっていうのがびっくりしました。わかめスープって日本では脇役的な存在なので、韓国では誕生日のわかめスープはメイン扱いですよ。なんだか不思議・・・。
- 打撲(青あざ)と卵をコロコロするシーン、よく見かけます
- 韓国の病室には、必ず!と言っていいほど、すごい勢いの「加湿器」ありますね～。
- カルチャーショックというほどでもないですが、女性が笑いながらやけど舌打ちしますよね。。。『秋の童話』とか「チッ!!」って…。
- もともと気性の他に、韓国語って日本語に比べてポキャブラリーがほんとに少ないんですよ、その分感情表現を加えてバリエーションを作っている、という気がします。言葉じゃなくて気持ちを伝える文化なんじゃないかなーと韓国語をやっていると感じます。逆に日本は言葉が実に多種多様化されてて、感情を言葉で伝える文化なのだと感じます。
- 女が強そうだけど、父親が絶対である。日本も昔はそうか…

日本でもおまじないや定番の行事などはあるが、韓国ドラマに見られる風習や慣行との違いも多い。怒られたときにする反省のポーズや、誕生日にわかめスープなど、韓国の定番の表現を見ることが出来る。舌打ちは日本人にとって悪い印象を与えるが、韓国では親しい間柄で冗談を言う時などでも舌打ちをする。国によってタブーや受ける印象が異なる行動があるが、韓国人の舌打ちもその一つである。

儒教意識の強い韓国は親の存在、特に父親の存在は大きい。かつて日本もそうであったように、昔の日本を感じる。(失われた古き良き日本文化

上記のオーディエンスの発言やキーワードを表3(次ページ)に整理した。

食文化や撮影方法など、日韓の違いについて視聴者の気になる声を分類した。「韓国ドラマを見ていると同じアジア圏であるはずなのに違うことが気になる」という心情が視聴者の反応からわかる。アジア人として、顔の特徴や服装、食べ物など似ている部分が多い分、違和感や異質性を感じ取っている視聴者が多いといえるだろう。

上表に示すとおり、似て非なる食文化の違いや、日本とは異なる車社会の違い、初恋や女性への贈り物を大切にす文化への憧れ、肉体美を披露する俳優の違い、日本ドラマと比較することで感じるドラマ制作・慣行の違い、貧富の差を強調するドラマの定番な題材の違いや、高度な携帯電話やネットが普及されている社会への驚き、またふとした時に感じる、失われた古き良き日本文化の再発見など、様々な文化や習慣の違いが、視聴者の興味を引き立て、作品を通じた文化交流が、他の国のことを学ぼうというきっかけになってくる。また、今回のコミュニティ分析に利用したトピックには、1000以上のコメントが寄せられ、さらにパート2もできているほど人気のトピックであると言える。視聴者にとっては、その文化の違いから起こる異質性をつつこみながら鑑賞することも韓国ドラマの魅力の一つとなっているのではないのだろうか。

第4章 ドラマの魅力と韓国文化

第4章では、第3章と同じく、mixiコミュニティ「韓国ドラママニア」内の『韓国ドラマが好きな理由』というトピックから、視聴者がなぜ韓国ドラマに魅力を感じるのか、複数のオーディエンスに共通性が見られるコメントを中心に抽出した。オーディエンスのコメントは、①作品表現全体の魅力、②ドラマに現れた感情と精神性に分類した。さらに今回はオーディエンスの声を拾うことはできなかったが、精神性の一つである韓国ドラマに見られる韓国人の感情「恨」とは何か、そして日本人視聴者を惹きつける韓国ドラマの魅力はどの

表3 日本の視聴者が韓国ドラマに認知した文化の相違点と作品の魅力要因

	オーディエンスが反応したシーンなど	作品表現の文化的背景	作品の魅力要因
食文化	<ul style="list-style-type: none"> ●アルミ鍋からそのまま食べる ●蓋をお皿代わりにする ●膝を立てて食べる 	はしを使うことや作法・食べ物は似ているが、習慣が違う	同質性を持ちながらも異質性を感じる（似て非なる習慣・食文化）
車社会	<ul style="list-style-type: none"> ●ルームライトをつけたまま運転 ●車の急停車&急Uターン ●乱暴な運転 	マナーや習慣の違い、ドラマの撮影方法の違い	日本と比較することにより感じる違和感。（異なる習慣・異質性）
記念日・初恋	<ul style="list-style-type: none"> ●記念日が好き ●初恋や二度目の恋にこだわる ●最初で最後の恋を謳い文句にする 	記念日を大切にすることや、相手を想ってプレゼントを贈る	女性の憧れの象徴でもある光景が普通であることの驚き（初恋＝純潔・純粋な愛・永遠の愛のシンボル、異質性への憧れ）
俳優の肉体美	<ul style="list-style-type: none"> ●おんぶするシーンが多い ●バスケットシーンがある 	日本と韓国の俳優との違い	（俳優の異質性・人物描写における身体性・肉体美）
ドラマ制作の慣行	<ul style="list-style-type: none"> ●ブランドロゴを隠す ●虫が映り込む ●放送時間が毎回違う 	ドラマの制作方法の違い、日本ドラマとのギャップ	（ドラマの制作方法の違いから感じる異質性）
貧富の差	<ul style="list-style-type: none"> ●貧富の差が激しい ●お金持ちの家はすぐに病院・個室 ●ネットの発達 	ドラマの題材として貧富の差は定番、携帯電話やネット社会の違い	（制作過程の違いから起こる異質性・日本以上に進んでいるネット社会への驚き）
風習や慣習	<ul style="list-style-type: none"> ●両手を上に挙げて反省のポーズ ●病室の加湿器 ●父親が絶対 	父親の存在が大きい。かつて日本もそうであったように、昔の日本を感じる	（失われた古き良き日本文化の再発見）

ようなところにあるのかを考察する。

①作品表現全体の魅力

韓国ドラマのオーディエンスは、少なからずどこか日本ドラマと比較しながら鑑賞していることが多い。日韓のドラマを比較することにより、違いを感じる。その違いから見えてくる韓国ドラマの魅力とはどのようなものなのだろうか。

■ストーリーの魅力

オーディエンスが韓国ドラマを好きな理由として挙げていることに、ストーリーの魅力がある。

- ツッコミどころ満載だけど目が離せないストーリー
- 細かいところに拘らないテンポの早い展開とストーリー。1話で、日本のドラマなら

2～3話分に相当するくらいの濃さがありますね。(細かいところは突っ込みどころにもなりますが面白ければ許せます)昔は日本のドラマでも多かったですが、続きが気になって仕方がない終わり方をする。

- 日本のドラマも、面白いものもたくさんあるのに、どうしてこうも韓国ドラマにもはまったのか。それは、私にとっては多分に、俳優さんの素敵さにも有ると思うのですが、ストーリーのじれったさにあるのかもしれないですね。(笑)
- 単純明快。これに限ります。日本のドラマのように変に凝りすぎてないのがいいですね。ありえない展開も多いから、ドラマに現実味を求める方にはダメでしょうね…私はむしろ現実逃避できるからOKです(^_^)ただ、病気が多いのだけは勘弁ですが。
- 日本と違うところは、日本は1クール12話だけど韓国は1クール20話前後ありますよね～だからかわかりませんが、内容が深い！濃い！
- 日本ではありえない設定と、ありえない展開。どうなるのって、次が知りたくなくて仕方ないところ。

このように、韓国ドラマのストーリーをドラマの魅力として語っているオーディエンスは少なくない。日韓のドラマ制作の違いから起こる内容の濃さや、日本ドラマではありえない展開に魅力を感じている。では、日韓のドラマの違いとは何か。まず、第一に挙げられるのが、放送スタイルである。日本は週に1回の放送が基本だが、韓国ドラマは週に2回、二夜連続の放送スタイルをとっている。撮影は放送の直前から始まり、ほぼ放送と同時並行の形で進められていく。切羽詰った状態で制作しているわりに、ドラマの完成度は高く、撮影期間が短縮できて制作費を安く抑えられることから、スタッフや演者は大変だが、テレビ局側としては都合であることから、短期集中の撮影方式は改められることもない。

また制作と放送が同時進行の韓国ドラマは、作品の展開に視聴者の意見を反映しやすい。インターネットが普及してネティズンと呼ばれるネットオー

ディエンスが生まれ、ドラマの結末までも変えてしまう現象まで起きている。日本で韓流ブームを巻き起こした『冬のソナタ』で当初死ぬはずだったチュンサン(ペ・ヨンジュン)がそうならなかったのも、視聴者の意見が大いに反映された結果なのである。

日本のドラマにはない魅力として、制作方法の違いから起こるドラマ内容の充実さ、韓国ドラマのありえない展開・ストーリーが、日々の生活の中で、現実逃避の時間となったり、夢を見られる時間となっているという意見が多かった。(非現実的な設定による現実逃避・ストーリー展開のおもしろさ・ドラマ内容の充実)

■俳優・ドラマ内の台詞

- 日本のドラマじゃ絶対きけないクサイせりふ、紳士でイケメンな俳優さん&美肌の女優さんがステキだから、ハングルの響きが好きだから
- 俳優の個性も魅力ですが、加えて形振り構わない体当たりの演技。表情も豊かですね。少々くさくてもOKです。トビ主さんが書かれた言葉の魅力もありますね。吹き替え版なんて、ほんとに興醒めもいいところ
- 演じている俳優さんの人間性もさることながら、ドラマの中のキャラクターの人間くささがたまりません。日本人は感情をハッキリと表に出さず、まあ、それが日本人の良さなのかも知れませんが、私には韓国人の素直な表現がとても爽快です。
- 個人的に不思議なところは、はじめは俳優さんの容姿が気に入らなくてあまり気乗りせず見ている、最後まで見終わるとその俳優さんを好きになっていたりするところです。韓国の俳優さんに日本のドラマでもぜひ活躍して欲しいと切に願います。韓国なんて！と思ってる日本人もドラマを見れば目から鱗が落ちること間違いなし、だと思えます。
- 韓ドラは、俳優さんの演技が上手いのでめり込んでしまうのも魅力のひとつかな。

- 日本語吹き替え版から入った私は、字幕版で初めて生のお声を聴いた時には「なんて良い声」と感激。韓国の俳優さんは、モムチャンの方が多いため、声が低くて良い人が多いですね。
- 私も役者への先入観がないからこそ、毎回新鮮な気持ちで見ることが魅力かな。アメリカンドラマにも同じことが言えますが、どういう役者さんかタレントさんか全く知らないのです。演じる役そのものを楽しめるんです。
- 役者への先入観がない、というのはありませんね。
- 本当に整いすぎた顔……日本人に見えてくるマジック。絶対日本人俳優に重ねてしまう。これ不思議。
- 俳優・女優ともにいろんな顔をもっていて演技の上手さにいつも驚きます。だから日本芸能人のどんな役をしてもいつも同じ…というのにガッカリしますね。
- 字幕を読んでいるからなのか？深い～セリフが胸に飛び込んでくる！演技が上手で、セリフがなくても、表情での演技が出来る！俳優さんに、未知の部分が多い！
- 俳優さんたちの熱い演技によるものが大きい気がします。
- なにより「思いやりの言葉」的なものが多い！まっいわるゆるくさいセリフかもしれませんが、日本のドラマでいえば鳥肌かもしれませんが、韓国ドラマだとすんなり、しっくりくるんですね～不思議と…

韓国ドラマでは、アイドル性の高い俳優や女優が多い。美意識の高い韓国では、美しい俳優や女優を起用したドラマが多い。またそれに伴う演技力の高さも魅力に挙げられている。また、字幕を見ることで韓国語の魅力や俳優の声、「クサイ」台詞も字幕を見ることですんなり受け入れられる。ドラマ中の「詩的な」表現に強い印象を受け、日本にはない魅力を感じる。また「韓国なんて！と思ってる日本人もドラマを見れば目から鱗が落ちること間違いなし」というコメントに示されるように、日本人の韓国に対する偏見は抜きがたく存

在している。

また、生の韓国語を魅力としてあげている人も多い。アメリカなどの海外ドラマは吹き替えでもあまり違和感なく見られる（ドラマ『24』の吹き替えを真似る芸人が人気ということもある）が、韓国ドラマではどうしても違和感を覚えてしまう。それは単に、アジア人として顔や雰囲気は同質的であるが、違う面が多いので吹き替えではなく、字幕で見ることによって、その異質性のギャップを少なく感じているのではない。

（俳優の情熱的な演技や演技力の高さ、さらに韓国語による生の声の魅力、俳優の先入観がないことによる新鮮さ・偏見や誤解の気づき）

■美しい舞台設定と音楽

- 韓ドラの魅力は色々あると思いますが、まず効果音楽。ひとつのドラマで使われる曲も多く、場面に応じて心に響きます。絶妙ですね。
- 音楽は言うまでもなく素晴らしいですね。日本のドラマではOSTはなかなかできません。日本のドラマがそれだけこだわって作られていない証拠だと思います。
- 音楽もとても素晴らしいです。韓国のドラマ作りはハードで有名ですが、音楽・脚本・俳優たちの質が高いと思います。
- 皆さん書かれてますが、BGMの甘さ。素晴らしい。私の好きなラブラブさが倍増、嫌もっと増幅されてますよね。^^
- 映像がきれいで、音楽も耳に残ります！
- 日本のドラマと違ってすべてが綺麗。音楽。景色。

美しい舞台設定と音楽では、韓国ドラマの美学的、文学のレベル、またドラマのオリジナルサウンドトラックの発売など、副次的な商品文化を生み出した。さらに美しい舞台、特に美しい田舎の風景などは、次に挙げる日本人にノスタルジーを喚起させるものとも繋がる。（ドラマの音楽・映像の美しさ）

②ドラマに現れた感情と精神性

韓国ドラマには、登場人物がよくストレートに

感情を吐き出すシーンが多い。喜怒哀楽の激しい場面が多いのである。それは、感情をストレートに出すことに抵抗がないからである。むしろ、感情を抑えたり、言いたいことを言わないでいると、あまり人間的だとは見られない。日本では、感情を出しすぎるとかっこ悪いという面があるが、韓国では逆に感情を出さないと親近感がわかないことがあり、ドラマでも感情的なシーンが多くなる。その方が視聴者の共感を得やすいのである。

さらに韓国ドラマは、日本人視聴者にしばしば、ノスタルジーを感じさせる。それは、隣国であるという以外に、容貌の近さ、行動面・態度面での近さ、儒教的価値観の近さ、文化的距離の近さなどが挙げられる。また、その違いから日本の文化をかえりみることに繋がる。日本人視聴者が感じるノスタルジーとは、どのようなものなのか。

■異文化の面白さ、似て非なる不思議さ、失われた伝統文化へのノスタルジー

- 一番のポイントは、精神的なものや考え方、習慣的なものが日本と共通するところが多く、感情移入しやすいところだと思います。
- いろんなジャンルのドラマをいまだに飽きずに見ているのは、やはり全体的にバランスも良く、質も良く、そして韓国という自分たちの国を愛してる人たちが作っているからなのかなと思います。
- 脚本も昔の（昭和）のころの人々の絡み具合や、そんな人たちの間に育って忘れてしまった感覚が呼び起こされるような出来だと思います。今の日本では、ありえないけど異国のお話なら、これもありかな..と思えるしね。あと、つつこみどころが多くって、なにしてんの！とか、そうそうとか、感情移入がしやすいかな？
- 文化の違いが垣間見れるのも、興味深いし、すれ違いの多さ、貧富の差、超金持ちの王子様、といった、昔懐かしい漫画の要素がたっぷりなのも、ノスタルジーを感じてしまうんでしょうかね。初回は「？」と思っていても、3、4話目くらいからぐいぐいと引き込まれているストーリー展開にも、

「今、ここで辞めたらもったいない」と言う気持ちを持たせているのかも。（笑）

- 国民性でしょうか。喜怒哀楽がハッキリしているのも爽快♪ ドラマや映画を通して韓国や朝鮮半島の歴史を改めて勉強させてもらってる気がします。
- 魅力は奥の深さでしょうか。過去があって今があるみたいな人間の生き方まで示すような奥深さ。
- 韓流ドラマは家族、愛、きずななど今日本が若干失いつつあるものがあるのかもしれない。あと、同じアジアで顔も似て親近感が沸きますね
- 日本に似ていて文化習慣が違う不思議さ。
- 似ている様で、異国の文化、異国の人！あげれば、切がありません。
- 人としての温かみ、家族の大切さや人生の奥深さを表現するための設定や素敵なセリフの数々、..
- 情が厚くて、気持ちをストレートに表現するところも好きです。男性は強くて優しく男らしい。そして一途。女性は貧しい立場が多いですが、逆風にもめげず強い。
- 韓国ドラマのいいところは、古き良き日本がそこに感じられるからです。また、今の日本人にはない、家族愛・人間愛がそのまま表されていて、今の日本人は韓国人に人として到底かなわないと思いられます。韓国では子供が親を殺すなんて考えられないのではないのでしょうか？年上の人を自然に立てているし、日本人が無くしてしまった大事な部分をそのままに国が発展しているようで、うらやましさを感ずります。日本人として考えさせられる材料がてんこ盛りのところが、私が韓国ドラマを愛する一番の理由です。

（ドラマから感じる韓国人の愛国心、国民性の魅力、失われた日本を思い起こす映像や、家族関係、感情移入）

ここで、以上のことを整理してみると、

- ①非現実的な設定による現実逃避・ストーリー展

開のおもしろさ・ドラマ内容の充実

- ②俳優の情熱的な演技や演技力の高さ、さらに韓国語による生の声の魅力、俳優の先入観がないことによる新鮮さ、偏見や誤解の気づき
- ③ドラマの音楽・映像の美しさ
- ④容貌の近さ、行動面・態度面での近さ、儒教的価値観の近さ、文化的距離の近さ、ドラマから感じる韓国人の愛国心、国民性の魅力、失われた日本を思い起こす映像や、家族関係・自国の文化をかえりみるきっかけとなる

特に④の韓国ドラマが日本人にノスタルジーを喚起させること、また似て非なる文化に触れることにより自国の文化をかえりみるきっかけに繋がると感じているオーディエンスのコメントは興味深い。

③「恨」(ハン)について

最後に、今回、オーディエンスの声を拾うことはできなかったが、韓国ドラマの魅力の一つである、第2章で指摘した「恨」について触れる。

この「恨」とは、単なる恨みのことではなく、「心のどこかにずっと持ち続けている苦しみやもどかしさ」といえるものである。この感情は隣国からの侵略の歴史や同民族の争いを経験した韓国ならではのいわれ、日本人には理解しがたい感情の一つである。日本のわび・さびのようにその国に生まれ育った人間にしか理解しにくく、はっきりと定義づけできる感情ではない。幼い頃からその感情を感じ、親や祖父母から昔の話を聞き感じることもあれば、歌や文学を通して「恨」の感情に気づくこともある。いわば、先祖から受け継いできた民族的な感情が「恨」である。

この「恨」という感情がドラマの根幹をなしている例が多い。例えば、第2章で扱った悲恋系の3作品は、主人公、もしくはヒロインが亡くなって終わるといって、いわばハッピーエンドではない作品である。このように、韓国ドラマにおける巧みな悲劇の演出は、韓国の歴史での多くの悲劇や深い悲観が多いことを表している。韓国ドラマに深く根ざしている「恨」とは何かを日本人が理解することは難しいが、そういう感情があると知っておくと、ドラマの見方も変わってくる。戦争の悲劇を知っている日本人視聴者も意識はしなくと

も、「恨」という感情を敏感に感じ取っているのかもしれない。その無意識の「恨」の感情を受け取るにより感じる感情は、韓国ドラマを魅力的に感じる要素の一つなのかもしれない。

第5章 韓国に対する意識の変化 —韓流ブームがもたらしたもの

ここまでの章を振り返ると、第1章・韓流ブームが盛り上がった背景として、韓国ドラマ『冬のソナタ』を中心に、新しい文化の担い手としてスポットが当たった中高年の女性の存在があり、その活動が様々な文化交流の活発化をもたらしたことにある。日本人視聴者がなぜ、それほどまでに韓国ドラマに惹かれるのか、第2章で悲恋系のドラマ3作品を比較することにより、韓国ドラマのおきまり・韓国の習慣に分類した。第3章では、韓国ドラマ視聴者からのコメントを抽出する中で、ドラマを通じて、似て非なる国・韓国の同質性や日韓の様々な違いから起こる異質性、食文化、異なる習慣、異質性への憧れ、失われた古き良き日本文化の再発見などを見ることができた。さらに、第4章では、韓国ドラマにはまる視聴者は、作品表現全体の魅力や韓国人の感情、古き良き時代の日本や韓国人の精神性をドラマの中から感じとっていることがわかった。

この章では、ここまでの章をうけて韓国ドラマの魅力とは何かについて改めて考察し、韓流ブームの成果や日本人の韓国観の変化、さらに今後の交流や展開、課題などについて述べることとする。

■異質性と同質性の共存—韓国ドラマの魅力の核

これまでに述べてきたように、韓国ドラマの魅力、あるいは、はまる要因となっているベタな展開、日韓の違いや異質性は、日本にはない自由奔放さやダイナミックなものを示している。韓国ドラマを見て感じる、昔の日本のような風景や親子関係、年上の人を敬うという姿勢など、日本と韓国には同質性と異質性があり、それらを感じ取ることで、さらに韓国の面白さが見えてくる。様々な違いを論じてきたが、それは一部であり、生活習慣やマナーを比較するだけでも、その違いがわかる。例えば、目上の相手に手を差し出す際(握手、物を渡す、お酒を注ぐ等)に左手を胸の方に

あてる、食器を持って食べない、目上の前での飲酒は顔を背け手で隠す、目上の前でタバコは吸ってはならず、目上の人が現れた場合はすぐに消すなど、数え切れない違いがある。

アジア人として、同じような顔をして、同じような食べ物を食べ、同じような社会制度の下で生きている（同質性）韓国人をドラマを通して観察していると、日本人との違い（異質性）がたくさん見えてくる。他の国のドラマ、例えばアメリカドラマなどを見ている時はすんなり受け入れることができる異質性も、第3章で拾ったオーディエンスの声のように韓国ドラマでは全てが違うわけではない。このことが韓国や韓国人に惹かれる理由の一つでもある。

■韓国文化を学ぼうという動き—韓流ブームの「成果」

これらの異質性を、単に習慣やマナーの違いということで片付けることなく、相手の文化や風習を知ろうと学ぶ人が出てきたことが韓流ブームの成果である。ワールドカップの共催や、「B o a」「東方神起」といった韓国出身のアーティストの活躍などブームによって韓国に関心を向ける日本人が急増した。さらにそれらにより日本人、特に若者の韓国に対する肯定的な意識も広がった。自分自身の内なる変化をプラスの方向に向ける人が増加したことが、さらにブームを大きくしたのである。これらの変化の入り口は、ドラマや映画などの作品を通じた受け手側に向けた一方通行の交流であった。しかし、その受け手である視聴者は言葉を学び、文化を学び、情報を交換する友人を作り……など、様々な方向へと目を向けることとなった。

■若者の韓国観の変化—伝統と新しさを包含する韓国人の人間観の魅力

最近の若者たちの韓国観の変化として、『日本人の韓国観—ポップカルチャーの交流は何を変えたのか—』において小倉紀蔵は「ポストモダンのルック・コリア」ということを語っている。「1970年代からの日本は、ポストモダンの時代に入っていきます。「終わりなき日常」という、要するに繰り返しの世

界を生きている。日本の若者が、そういう若者になってしまったところに、明らかな近代、あるいは前近代の韓国人というものが現れて、そこに新鮮な姿があったのです。」とある。

第3章・第4章で抽出したオーディエンスの声に、古き良き日本の文化・ノスタルジーを感じるという意見があった。韓国人の親を大切にする姿勢や愛国心は、日本の若者には新鮮な姿として映ったということである。第3章では、食文化の違い、第4章では、韓国ドラマ内の歌の魅力などに触れたが、すべてを含んだ韓国人の人間観は、ポストモダンの時代を生きる日本人にとって新鮮であり、また懐かしくもあり、魅力であるのだ。

さらに小倉は、「そういう韓国人が格好よく見える。韓国人が格好よく見えるというのは、日本の歴史の中で非常に重要なことなのです。私はこれを『ルック・コリア』と言っているのですが、韓国を見習おうじゃないか、韓国って格好いいんだといういくつかの『ルック・コリア』の動きがこれまでもありましたが、まさに1990年代の終わりごろから、第3の『ルック・コリア』の時代に入ったのではないかと私は思っています。」と語っている。

韓国を見習おう、韓国が格好いいんだということは、まさに今日の韓流ブームである。「ルック・コリア」という言葉通り、韓国をみることによって自国をかえりみる。ドラマという文化交流を通して、さらにそれをきっかけとして韓国を見つめることにより、どこか日本人の中にある韓国に対する偏見や誤解、優越感などが、このブームによって少なからず薄れていったように思う。

■生身の交流への入口—作品を通じた交流の意義と限界

日韓の異質性と同質性の共存について触れたが、視聴者の声でも、日韓の違い（異質性）について指摘する意見が多かった。しかし、これらのことは、一方で摩擦を生むこともある。同質性を感じれば感じるほど、自分たちの基準に当てはめて考えてしまう。違う国であるのだから違うことが当たり前であるのに、異質性にどうしても違和感や反発を感じてしまうのである。頭ではわかっている、同じように（同質性）感じれば感じるほど、

違い（異質性）が気になって仕方がないのである。また、作品とはいわばフィクションであり、作り物の世界では、実社会との違いからさらなる新しい偏見が生まれる可能性もある。異国の地である国とすべてにおいて理解し合える環境を作るとは困難である。しかし、例え理解できない面があったとしても、フィクションのみでなく、生身の交流ができるようになれば、少なからず歩み寄ることはできるであろう。

歴史認識の問題や文化の魅力など、すべては我々が、それらを知ることから始まる。知らなければ何も始まらないのである。今日の韓流ブームは、そのきっかけを与えてくれるものであり始まりでもある。

■今後の展開

今後、日韓の交流は、文化の同質性と異質性の共存や、地理的に近接し、低コストで頻繁な行き来ができる隣国であることなど、他国と違い利点が多くある。この韓流ブームを通じた文化交流がこれらの利点を活かして、今後さらなる発展、活発な交流をもたらすことを期待できるであろう。韓国の文化を学ぶだけでなく、日本の文化や良い面をもっともっと知ってもらいたいという気持ちもまた多くある。

韓流ブームは現在、日本人が韓国に夢中になるといった一方向的な印象を受けるが、戦後、表立った文化交流がなかった時代にも、韓国には日本作品が隠れたルートで流れていた。

文化交流の行き来のサイクルは以前から続いており、韓国で日本の文化の影響を受けたおもしろいものができて、日本でまた韓国の影響を受けたものができる。そういったところからまた新しい文化交流も生まれてくることを期待したい。それは日韓共作やリメイク作品など、お互いの良い面をプラスさせた文化交流により、隣の国であるだけでなく、同じアジア圏という中で協力し合える存在になっていくことが望まれよう。

■課題

今回の論文では、悲恋系の3作品、オーディエンスの声は日韓の文化の違いや、ドラマの魅力に絞って考察・分析した。数多くの韓国作品がある

中で、さらに違うジャンルやオーディエンスの声を拾うことで、さらなる韓国観の変化や日韓の違い・魅力について考え、視野をいっそう拡げていくことを今後の課題としたい。

<注>

(注1)

- ・『天国の階段』 <http://kankokudorama.livedoor.biz/archives/50016551.html>
- ・『ごめん、愛してる』 http://kankokudramatv22.livedoor.biz/archives/cat_50188091.html
- ・『秋の童話』 <http://kankokudramatv22.livedoor.biz/archives/54132585.html>

(注2)

- ・http://homepage1.nifty.com/tuty/korea_doramanomiryoku.htm 最終閲覧日（2009年1月13日）
- ・mixi <http://mixi.jp/home.pl> コミュニティ「韓国ドラママニア」トピック『韓ドラを見て気になること』最終閲覧日（2009年1月13日）
- ・曹喜澈 『食わず嫌いの韓国』、グラフ社、2005年12月
- ・康熙奉 『愛してるっ！！韓国ドラマ』、TOKI MEKIパブリッシング、2006年3月
- ・韓国ドラマ『天国の階段』『ごめん、愛してる』『秋の童話』

<参考文献>

- ・曹喜澈 『食わず嫌いの韓国』、グラフ社、2005年12月
- ・康熙奉 『愛してるっ！！韓国ドラマ』、TOKI MEKIパブリッシング、2006年3月
- ・『日韓文化交流この1年 -2002年日韓国民交去年をふりかえる-』、国際交流基金、2003年3月
- ・毛利嘉孝 『「日式韓流」—「冬のソナタ」と日韓大衆文化の現在』、せりか書房、2004年11月
- ・シンポジウム報告書『日韓交流の現在と未来—2002年日韓国民交去年を振り返る』『日本人の韓国観—ポップカルチャーの交流は何を変えたのか—』国際交流基金、2004年
- ・mixi <http://mixi.jp/home.pl>